

体内完全埋込式人工心臓 (人体火力発電所・肝臓発電)

張 契洙(チャン・ソルス)

この人工心臓は、臓器の様々な動きから発電しエネルギーを体内で還元する仕組みであり、体外バッテリー、ケーブル感染の問題を解決できる。

50年後には、戦争、宇宙進出、環境破壊、食糧不足による飢餓が起こり、芋・大豆を主食として人類が生き伸びる方法が必要となる。

01

人体火力発電所

大豆は主成分がタンパク質で、消化時アンモニアが腎臓・腸内で発生し、肝臓で尿素に変えられる。臓器から得られるアンモニア、尿素、水、CO2を利用し体内に「人体火力発電所」を作る。

02

肝臓発電

芋の主成分はでんぷんで、肝臓に蓄えられたグルコースで発電する仕組みだ。肝臓の余分なグルコースにより発電するため体内脂肪が減り、生活習慣病による食事制限が減り心理的負担も減り、食品ロスの対策となる。



火力発電所を体内設置

火力発電所と同じ仕組みで、アンモニアを燃やすことでCO2を温め、尿素と水の混合物でCO2を冷却出来る。CO2を使うことで水の10倍のエネルギーを得られる。



人類が環境に依存せず生き抜くための方法論



02. 肝臓発電

肝臓の中にあるグルコースを全て使ってしまっても肝臓は脂肪からグルコースを作り出すことができる。肝臓は尿素を作る。尿素と水を使うと冷却することができる。また、尿素を使った後はトイレに流せば良いのであまり、害はない。

01. 臓器を火力発電所に



アンモニアを熱すると二酸化炭素は発生しないが窒素酸化物が発生し、窒素酸化物は肺などに害が及ぶ。また、水の代わりに二酸化炭素を使うので亀裂、膨張、変形が起きにくい金属で容器を作らなければならない。



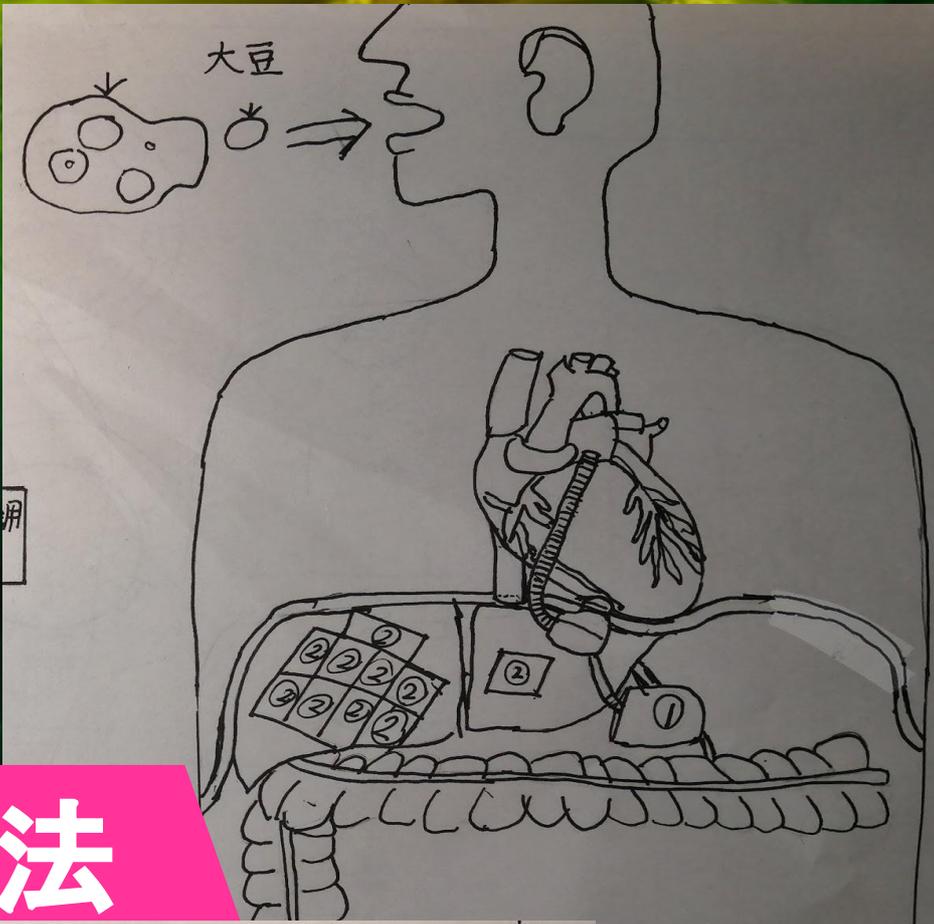
04. 廃棄が容易

尿素と水の混合物は危険ではないのでそのまま、体外に出すことができる。

03. 腎臓・腸

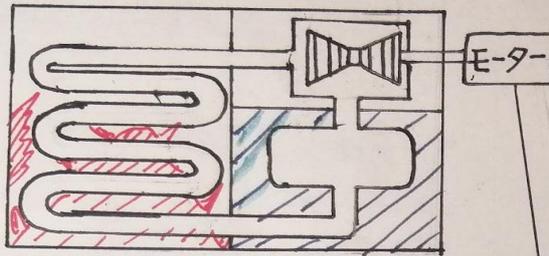


腎臓・腸内で出来たアンモニアは通常の場合、肝臓へ血液を使って運ばれ肝臓で尿素に変えられる。しかし、アンモニアを燃やすと二酸化炭素を出さずに火力発電として使える。



使用方法

①人体火力発電



②グルコース発電



グルコースが減ると「食べて」と言う指令をだすセンサーをつける

柔らかいグルコース発電機はハイドゲルを半個体化し、ダイヤル上にして中に基盤を入れる。

1枚1枚が柔らかいグルコース発電機を導線でつなぐ。そして肝臓を包う。